

解説

東亜建設工業(株)の海外展開と海外赴任を経て感じたこと

からさわ としき
唐澤 俊樹

東亜建設工業(株)
国際事業本部土木部積算課



1 はじめに

今回、本誌森田編集委員長より寄稿のご依頼があった。筆者自身の経験から、推進工法について書くのは厳しいと感じたので一旦は辞退したが、推進工法に係わらず「東亜建設工業の海外展開と私自身の海外経験について語ってほしい」とのお言葉をいただき、執筆をお引き受けした。

子どものころから漠然と「将来は海外で活躍したい」「地図に残るような大きなものをつくりたい」という思いを胸に、海外事業において伝統と実績がある東亜建設工業に入社。3年間の国内施工管理経験を経て、入社4年目から念願の海外土木技術者として従事している。

以下、当社の海外展開と私自身のコートジボワール共和国への海外赴任経験を経て感じたことについて記す。

2 東亜建設工業の海外展開

2.1 歴史

当社では1963年（昭和38）に海外事業部（現国際事業部）を新設し、シンガポールを中心に営業展開を図り、1976年（昭和51）には、当時日本の建設業が受注した海外工事で最大規模のチャンギー国際空港造成工事を総額298億9500万円を受注した。

また、1972年（昭和47）に中東への進出を図り、イ

ラクのコール・アル・ズベール地区で一工業港造成の大型工事を334億円という創業以来最大の価格で1976年（昭和51）を受注した。しかし、イラン革命の勃発、1980年（昭和55）9月に始まったイラン・イラク戦争により現地から撤退を余儀なくされた。

1981年（昭和56）3月期決算において、海外不採算工事の計上が大きく響き、多額の当期損失を計上した。同年4月、不転の決意をもって3箇年計画がスタート。国内工事を主とした経営、海外の赤字工事の早期完成を基本方針とし、予定していた計画最終年度よりも1期前倒しで、1983年（昭和58）3月期決算で復配を実施した。

その後、進出国・事業を拡大しながら世界各地の発展に貢献。現在まで53箇国で571件のプロジェクトに従事し、累計完成高は約100億ドルである（図-1、2）。

3 海外赴任経験（コートジボワール共和国・アビジャン穀物バース建設事業）

3.1 概要

アビジャン港はコートジボワール国の実質的な首都機能を持つアビジャンに位置し、バルク貨物取扱量がサブサハラ・アフリカで最大であり、コンテナ取扱量でも西アフリカ最大の港である（図-3、表-1）。

当該工事は、このアビジャン港において約10haを埋立て、穀物バースを整備するODAの有償資金協力事

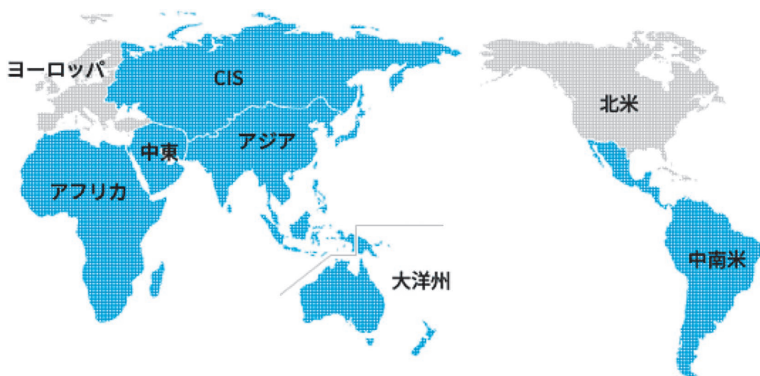
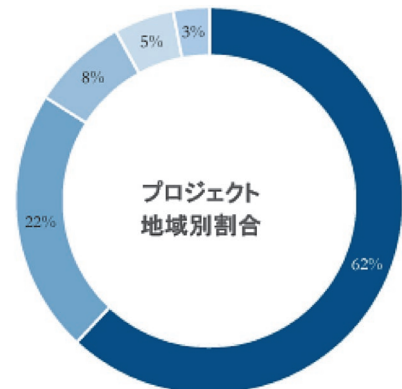


図-1 プロジェクト実施地域



■アジア ■中東 ■アフリカ ■ラテンアメリカ ■オセアニア

図-2 プロジェクト地域別割合

業であった。

当社のアフリカでの工事実績は、1977年のエジプトでのスエズ運河浚渫工事の契約以来、既に14箇国、40プロジェクトの実績を保有しているが、コートジボワール共和国でのプロジェクトは初めてであり、当該案件はアフリカでの15箇国目、41プロジェクト目（2020年4月時点）の案件となった。

3.2 アビジャン穀物バース建設プロジェクトの筆者の役割



図-3 コートジボワール共和国 位置図

筆者はサイトマネージャーとして、施工の計画・管理（工程、品質、安全）をプロジェクトマネージャー（現場所長）はじめ上司の指導の下、主体となって行う立場であった。

日本では主流となっている、各工種の下請け業者との請負契約ではなく、当現場では、現地でエンジニアと作業員を直接雇い、また、日本から総勢10名以上の職人（杭打工、鍛冶工、潜水士、型枠工）を派遣して直営で現場運営を行った（写真-1、2）。

3.3 海外赴任を経て感じたこと

子どものころから夢見てきた、念願の海外赴任であったが、苦労も多かった。

筆者が任されたサイトマネージャーは、現場で発生す

表-1 コートジボワール共和国 基礎データ


正式名称	コートジボワール共和国 / Republic of Cote d'Ivoire
人口	約2,638万人（2020年）
首都	ヤムスクロ
言語	フランス語（公用語）、各民族語
宗教	イスラム教30%、キリスト教10%、伝統宗教60%
面積	322,436 km ² （日本378,000km ² の約0.9倍）
通貨	セーファーフラン(XOF)、1XOF=約0.20円
実質GDP	23兆9,534億CFA（約4.5兆円）（2018年）
GDP成長率	7.8%（2017年）、7.7%（2018年）
1人当りGDP	USD 1,695（2018年）
国旗	 旧宗主国フランスの影響を受け、三本筋が国の標語「団結・規律・労働」に対応。オレンジは北部サバンナを、緑は南部処女林、白は両地域の統一を意味する。
気候	南部の沿岸地域は高温多湿の熱帯雨林、平均気温は28℃、湿度は80%以上。6～7月が大雨季、10～11月が小雨季で、年間降雨日数は140日、年間降水量は1,600mm/年。



写真-1 現場測量状況



写真-3 ローカルエンジニアとともに



写真-2 施工図面作成状況



写真-4 休日の様子 (観光船でピースサインをする筆者)

る逆境の波を真正面から受け止める立場であった。発注者やコンサルタントは日本とは違い、請負側への相互リスペクトは薄く、明らかに専門的な観点から間違っていることがわかっていても意見を曲げなかった。下請けからのクレーム（ローカル企業は自助努力することなく損失の補充のみ要求する）、信頼していた現地エンジニアの突然の離職、現地で起こる日本では起こりえないような想像を超えるトラブル、毎日のように起きる逆境との闘いが続いた。現場が思うように進まない中でのプレッシャーに押しつぶされそうになった。

しかし様々なトラブルは、プロジェクトマネージャーを中心にチーム一丸となって乗り越えてきた。困難に直面するたび、残された50名以上のローカルスタッフと日本から派遣された職人（その道を究めてきた達人たち）の知恵と力を借りて工事は無事完了した。

完工した時に見た現場の夕日の美しさ、思い返せば苦難が90%以上であったが、残り10%の喜びがたまらなく幸せに感じた。工事が終わればすべてが良い思い出に変わり、自分の成長の糧となった。

余談だが休日はローカルスタッフに現地の観光スポットを案内していただいたり、食事を共にした。またアビジャンに住む日本人とテニスやゴルフをして交流を深めた。日

本の宝ともいえる職人たちと寝食を共にしながら生活をした。これらの経験も海外工事の醍醐味といえる（写真-3、4）。

4 おわりに

昨今、苦勞をせず楽な道を選ぶという風潮があるように感じている。海外だけでなく日本における土木技術者は、その風潮に逆らっているように見えるが、筆者は苦勞とやりがいが幸せの表裏一体と感じている。日本の代表として国際貢献を全うできることは誇らしく、やりがいが大きい。これからも、間違いなく苦勞は続くだろうが、その先に待つ確かなやりがいを求め、日々奮闘したい。そして今後も大きなプロジェクトを成功させたいと思う。

○お問い合わせ先

東亜建設工業(株) 国際事業本部土木部積算課
〒163-1001 東京都新宿区西新宿3-7-1
新宿パークタワー 31階
Tel : 03-6367-0802 Fax : 03-6367-0809
E-mail : t_karasawa@toa-const.co.jp
<https://www.toa-const.co.jp>